

『東海宣言』に見る現代の諸問題

青木義紀

はじめに

本論は、2023年9月19日（火）から22日（金）にかけて、岐阜県の長良川国際会議場で行われた第7回日本伝道会議において生み出された東海宣言「『おわり』から『はじめる』私たちの祈り」に関する論考である。とくにその中で言及された現代の諸問題を取り上げ、それぞれの課題に向き合うこの宣言の視点や姿勢に言及する。本論は、『東海宣言』の作成に一委員として携わった者の立場から論じるものであるが、それは決して公式な見解や唯一の解釈であることを意味しない。あくまで、一委員の視点からの理解や問題意識である。

全体は大きく三つの部分からなる。第一は、『東海宣言』の全体的な特徴と構造を紹介し、祈りとしてまとめられた今回の宣言の意義に言及する。第二は、本文に沿った視点や姿勢の解説で、「～を越えた宣教協力を『はじめる』ことができるように」という各項目のタイトルに沿って四つ取り上げる。最後に、『東海宣言』全体を踏まえて、神学的な考察と応答を行う。

全体的な特徴と構造

『東海宣言』は、従来の日本伝道会議の宣言文と異なり、当初から草の根的に作成することが構想されていた。各地の教師や信徒の意見を広く集め、それらに聖書的・神学的考察を加えて文案が整えられ、様々な紆余曲折を経て、最終的に「祈り」として編まれることとなった。「祈り」となったからといって、宣言や誓約の要素が排除されたわけではない。むしろそれらの要素を含めた上で、感謝や賛美もあり、告白や悔い改めやとりなしもある。そのような様々な

要素を含めて、困難な時代に希望をしっかりと握って祈ること、ともに肩を並べて神に向かって祈ることが意図されている¹。

従来の宣言という形態から変化したことで、福音派としての立場や確信の表明が後退するのではないかという懸念があるかもしれない。また祈りの性質上、神に向かって「～してください」という表現が増えることで、それが私たちの使命や責任を曖昧にすることにならないかという心配もある。しかし、主権者なる方の前に責任ある自己として出ること、かえって祈りをする自らの神学的確信や立場が鮮明になり、私たちが切なる思いで訴えるからこそ、かえっていま自分が何をすべきかが具体的に become という面がある。その意味では、祈りの形態になったことで、かえって宣言の要素がより深まり、私たちの使命や責任がより深く私たちに問われることになるとも言える²。そこでは、私たちが主ご自身に押し出されて、具体的な働きに着手することが期待されている。

『東海宣言』の全体は、以下の6つの項目から構成されている。

- ①「おわり」を見つめることができるように
- ②立場を越えた宣教協力を「はじめる」ことができるように
- ③教派を越えた宣教協力を「はじめる」ことができるように
- ④地域を越えた宣教協力を「はじめる」ことができるように
- ⑤文化を越えた宣教協力を「はじめる」ことができるように
- ⑥「おわり」から「はじめる」ことができるように

この祈りは、「おわり」を見つめることから始め、直面する現実を受け止め

¹ 作成の経緯と意図については、以下を参照。赤坂泉「JCE7 東海宣言が生まれるまで」JEA 宣教委員会宣教研究部門編『第7回日本伝道会議宣教ガイド 2023』（いのちのことば社、2023年）、215-216。

² 従来の宣言文は、過去の5ついずれも、本論の中で自らの立場と決意表明がなされた後、末尾には必ず祈りが付されていた。それは、本論で述べられた宣言の内容を成し遂げてくださるのは主なる神ご自身であることの信仰表明であり、全体が最後の祈りに集約されて、具体的な行動・実践へと突き動かされていく構造となっていた。その意味では、今回全体を「祈り」として編むという点では従来からの変化となったが、それはあくまで構造上の変化であって、実質的な変化ではないことを指摘しておきたい。むしろ、全体が祈りになることで、事を成し遂げてくださる神の主権性がより前面に押し出され、その中で、私たちが主に委ねつつ、具体的な行動や実践に出ていく使命や責任が鮮明にされたのである。

つつ、そこから「はじめる」ことへと結実する祈りである。そしてこの祈りは、具体的な行動へとつながっていくことを期待し、実際にできることから着手することを誓う「祈り」でもある。

②-⑤には、4つの境界を「越えて」はじめることが掲げられている。今ある「立場」を越えること、自分の所属する「教派」の壁を越えること、自分の生活する「地域」を越えること、そして自分の持っている「文化」を越えていくことである。いずれも「越える」ためには、現状維持や自己満足に浸ることをやめなくてはならない。そこに「おわり」をもたらし、新たに「はじめる」ことを誓いつつ、主の助けを祈るのである。因みに、全体が6つに分類されているのは、一週間で祈ることを想定している。

①と⑥は、それぞれ全体的な総括に該当するので、これらの総括に含まれるより詳細な個々の内容を取り扱う②-⑤を本論では取り上げることとする。

立場を越えた宣教協力を「はじめる」ための課題

ここではまず、世代別の課題が取り上げられる。子ども、若者、独身者と結婚に導かれる人、年齢を重ねた人々である。このように世代別に人を分類することには一定の意味と有用性があることを認めるが、同時にそこには危険と課題があることも見逃せない。人をご自身のかたちに似せて創造された神は、私たち一人ひとりを特別に固有な存在として造られた。そのような多様な固有性は、世代別の分類ではまとめることができない。このような便利な分類によって、しばしばその人固有の課題や悩みが等閑視され、その人個人と向き合うことなく、その世代の主要な特徴を理解したことでその人を理解した気になってしまうということが起こりうる。そこでこの祈りは、世代別の課題を取り上げる前に、その大前提として「この世に生を受けたすべての人」の「いのち」と「尊厳」に触れるのである。そして神から与えられた固有の「いのち」と「尊厳」を持つ一人一人が、「福音によって生きる」ことを懇請する。世代別の課題は、この大前提の上に展開されるのである。

第一に取り上げるのは子どもである。現在、子どもをめぐる課題は多様である。その一つ一つを取り上げることは不可能だが、「声を上げること」すらできないまま苦しんでいる子どもたちに言及することで、様々な課題を抱えた

子どもたち一人一人に向き合おうとする姿勢が示されている³。子どもたちの苦しみや痛みに「気づく」こと、そして具体的に「手を差し伸べること」によって私たちにできることに着手していきたい⁴。

第二に取り上げるのは若者である。教会から若者が減少し、神を知らない若者が増えている。希望を失い、生きる意味を見出せず、自暴自棄になったり無気力になったりする若者も少なくない。そのような現実を見据えながら、この祈りは、若者が神との出会いにおいて自己のアイデンティティを確立し、「学ぶこと」「働くこと」「遊ぶこと」など、彼らの生活のすべてにおいて神を主権者として生きることを求める。若者たちが希望を抱き、自己の存在意義を知って、生き生きと成長するということは、全世代にとっての希望であり、社会や

³ 個々の子どもと向き合うこと、寄り添うことが重視される。Cf. 田中哲『見えますか、子どもの心』(いのちのことば社、1994年)；田中哲『“育つ”こと“育てる”こと—子どものこころに寄り添って』(いのちのことば社フォレストブックス、2016年)；坪井節子『子どもたちに寄り添う』(いのちのことば社、2007年)；村上純子『キリスト教カウンセリング講座ブックレット16 子育てと子どもの問題』(キリスト新聞社、2009年)。

⁴ 近年は、「子どもの貧困」が問題となっている。ここで言われる「貧困」とは、物理的な貧困や目に見える貧困だけでなく、より構造的な貧困も含んでいる。Cf. 阿部彩『子どもの貧困：日本の不公平を考える』(岩波新書、2008年)；阿部彩『子どもの貧困Ⅱ—解決策を考える』(岩波新書、2014年)；湯浅誠『「なんとかする」子どもの貧困』(角川新書、2017年)；朝日新聞取材班編『増補版 子どもと貧困』(朝日文庫、2018年)；渡辺由美子『子どもの貧困：未来へつなぐためにできること』(水曜社、2018年)；松本伊知朗・湯沢直美・平湯真人・山野良一・中嶋哲彦編著『子どもの貧困ハンドブック』(かもかわ出版、2016年)。キリスト者の立場から扱ったものとしては以下を参照。富坂キリスト教センター編『奪われる子どもたち：貧困から考える子どもの権利の話』(教文館、2020年)；与野輝・茅野志穂『現場報告“子ども食堂”これまで、これから』(いのちのことば社カイトスブックス、2019年)。子どもの貧困の構造的な問題については、以下を参照。松本伊智朗編『「子どもの貧困」を問いなおす：家族・ジェンダーの視点から』(法律文化社、2017年)；松本伊智朗編『子どもと家族の貧困』(法律文化社、2022年)；大澤真平『子どもの「貧困の経験」：構造の中でのエージェンシーとライフチャンスの不平等』(法律文化社、2023年)；山野則子『子どもの貧困調査：子どもの生活に関する実態調査から見えてきたもの』(明石書店、2019年)；松本伊智朗・湯沢直美編著『シリーズ子どもの貧困①生まれ、育つ基礎：子どもの貧困と家庭・社会』(明石書店、2019年)；小西祐馬・川田学編著『シリーズ子どもの貧困②遊び・育ち・経験』(明石書店、2019年)；佐々木宏・鳥山まどか編著『シリーズ子どもの貧困③教える・学ぶ：教育に何ができるか』(明石書店、2019年)。

世界においても希望である⁵。

第三に取り上げるのは「独身として歩む人々」と「結婚に導かれる人々」である。結婚に関する祝福や課題については、これまでも多く語られてきた⁶。独身として歩む人々にも、主からの豊かな祝福と使命があり、そのことも決して忘れられてはならない。また本来、家庭は、その人が最も安心して過ごせる場所であるべきだが、残念ながらそうでない現実が存在する。夫婦間や親子間の「暴力」や「虐待」など、様々な「危険」が家庭に潜んでいる。そのような課題は、家庭というプライベートな環境の内部で起こるので、なかなか問題が第三者に伝わりにくく、知られたくないという当事者の思いもあって、問題が深刻化しやすい。プライバシーを尊重し、適度な距離を保ちながら、隣人の家庭に対する関心とまなざしを大切にしたい⁷。

第四に取り上げるのは、「年齢を重ねた人々」である。年配者の抱える課題や悩みも様々で、単純化できない。そのため「様々な変化」を受け止めることができるようにと祈ることで、個人の必要を尊重する姿勢を示している⁸。また

⁵ 若者に関することについては、以下を参照。Cf. 関西学院大学神学部編『関西学院大学神学部ブックレット6 若者とキリスト教』（キリスト新聞社、2014年）；大嶋重徳『若者と生きる教会：伝道・教会教育・信仰継承』（教文館、2015年）；大嶋重徳『若者に届く説教：礼拝・CS・ユースキャンプ』（教文館、2019年）；原敬子・角田佑一編著『「若者」と歩む教会の希望：次世代に福音を伝えるために』（日本キリスト教団出版局、2019年）。

⁶ D. M. ロイドジョンズ『結婚することの意味：エペソ5・22-33 講解』鈴木英昭訳（いのちのことば社、1999年）；岡村又男『主に喜ばれる結婚と家庭生活』（いのちのことば社、1991年）；尾山令仁『新版 結婚の備え』（いのちのことば社、1990年）；唄野隆『聖書に見る結婚・夫婦・家庭』（いのちのことば社、1994年）；W. トロピッシュ『新版 真実の結婚を求めて』辻紀子（いのちのことば社、1995年）；水野健『結婚を考えている二人のために 増補改訂版』（いのちのことば社、2016年）；クリストファー・アッシュ『聖書が教える結婚と性』（いのちのことば社、2023年）；水谷潔『痛おもしろ結婚塾』（いのちのことば社、2015年）；丸屋真也『健全な夫婦になる鍵』（いのちのことば社、2022年）；ティモシー・ケラー／キャシー・ケラー共著『結婚の意味：わかりあえない2人のために』廣橋麻子訳（いのちのことば社、2015年）；（日本ルーテル神学大学教職神学セミナー『結婚：その恵みと試練』（日本基督教視聴覚センター AVACO、1993年）；ポール・トゥルニエ『結婚の祝福と課題：愛による連帯を求めて』野辺地正之訳（日本キリスト教団出版局、2009年）。

⁷ Cf. 長島正・長島世津子『結婚と家族の絆：キリスト教人間学の視点から』（教文館、2017年）。

⁸ 老いや高齢者の課題に関しては、以下を参照。Cf. 丸山軍司『老いを生きる』（いのちのことば社、1982年）；教皇庁 信徒評議会編『高齢者の尊厳と使命』（カトリック中央協議会、

「老い」という人類共通の課題を、単に生物学的な事柄として受け止めるだけでなく、信仰者特有の恵みと強みとして、「内なる人」が日々新たにされることにも言及している（Ⅱコリント 4:16）⁹。

世代別の課題に続いて、「偏見や差別、無理解に苦しんでいる方々」が取り上げられる。とくに「性的少数者」¹⁰、「外国人」、「路上生活者」、「重い病や心や体の『障害』を持った方」¹¹などに言及される。「性的少数者」をめぐる課題は、聖書的理解の問題だけでなく、当事者自身の葛藤、無理解や偏見からくる苦しみなど、複雑な課題を含んでいる¹²。聖書的理解に立つことは大前提だが、

1999年）。超高齢社会と教会の課題については以下を参照。山下勝弘『超高齢社会とキリスト教：特に障害者・高齢者と共存する教会形成を考える』（キリスト新聞社、1997年）；高齢者に対する説教と牧会の課題については以下を参照。Cf. W. J. カール Jr. 編『恵みにあふれて：高齢者への説教と牧会』（日本基督教団出版局、2001年）。高齢者福祉文化の思想史については以下を参照。Cf. 松井直樹『キリスト教高齢者福祉文化の思想史』（ヒューマン・ヘルスケア・システム、2020年）。

⁹ 日本福音同盟神学委員会論考集『流れ行く時の中で：年齢を重ねることの神学的な意味』（PDF、2024年）。この論考集では、少子高齢・人口減少時代における現実を見つめ、様々な視点からの「老い」をめぐる考察がなされている。とくに齋藤五十三「人間の存在意義を問う：人間の構成をめぐる」（pp. 49-65）では、この聖句（Ⅱコリント 4:16）に基づく神学的人間論の視点から考察がなされている。聖書釈義的には、解釈の分かれる個所であるが、一つの見解として興味深い。

¹⁰ 「性的少数者」という表現自体に異論を唱える人もいるが、そこに差別的意識や軽視する意図はない。性的少数者やLGBTQ+をめぐる課題について、現在日本のキリスト教界では大きく3つの動きが見られる。第一は、「性の聖書的理解ネットワーク」（Network for Biblical Understanding of Sexuality: NBUS）で「ナッシュビル宣言」を採択している。第二は、「NBUSを憂慮するキリスト者連絡会」で、性的少数者（Sexual minority）を傷つけるような事態を憂慮し、彼らが当たり前に尊重されることを望む立場を取っている。第三は、「ドリームパーティー」で、両団体やそれぞれに関係する人たちの対話が困難になった事態を憂慮し、結論を急がずに対話を続けることを訴えている。

¹¹ 世界教会協議会『神の家族：障害者と教会』鈴木伶子訳（新教出版社、1981年）；日本キリスト改革派教会 障害者問題研究委員会『主与え 主取り給う：障害者のための説教集』（聖恵授産所出版部、1982年）；島崎光正・阿佐博・小嶋三義・長沢仁司『主の肢々として：障害者と教会』（日本基督教団出版局、1983年）；NCC 障害者と教会問題委員会編『障害者神学の確立をめざして』（新教新書、1993年）；向谷地生良『精神障害と教会：教会が教会であるために』（いのちのことば社、2015年）。

¹² キリスト教の立場からこの課題を扱ったものには以下のものがある。斉藤善樹「聖書信仰は多様な性のあり方にどのように向き合うべきか」日本福音同盟神学委員会編『「聖書信仰」

その上で、苦しみや痛みを抱えている方々の声をどのように聞き、どう寄り添うのか。そしてそういう一人一人に、キリストが働いてくださることを願うのである。それがどのような変化や結果をもたらすかは、主に委ねるほかない。

教会内にある立場の違いの典型は、信徒と教師の間にあるそれである。それは身分や序列の違いではなく、召しと役割の違いである。両者の違いを無視してないもののようにするのではなく、むしろ違いを理解しつつ、互いに補い合っ

て協力し、支え合うことで主の教会を建て上げていくのである¹³。

立場を越えた宣教協力において基盤となるのは、主の良き創造に基づく、それぞれのいのちと存在の尊さに対する尊重である。主を信じていない人も、神に創造された尊い存在であることに変わりはなく、私たちはそのようないのちと存在に対する尊敬をもって、一人一人と向き合うことを大切にする。またともに宣教協励に励む信仰者同士は、同じ主の贖いを受け、キリストのからだなる教会に属する兄弟姉妹である。それぞれの立場や召しの違いはあっても、互いに尊重し合い、補い合っ

の成熟をめざして』(いのちのことば社、2017年)；赤坂泉「福音とセクシュアリティ：混乱の時代だからこそ」日本福音同盟神学委員会編『聖書信仰の成熟をめざして2』(PDF、2023年)、29-40；吉川直美「LGBTQ+と共に生きる教会」日本福音同盟神学委員会編『聖書信仰の成熟をめざして2』(PDF、2023年)、41-50；ジェフリー・S・サイカー編『キリスト教は同性愛を受け入れられるか』森本あんり監訳(日本キリスト教団出版局、2002年)；アンドリュー・マーリン『LGBTと聖書の福音：それは罪か、選択の自由か』岡谷和作訳(いのちのことば社、2020年)；ファミリー・フォーラム・ジャパン『聖書とLGBTQ：ジェンダーを理解する』(ファミリー・フォーラム・ジャパン、2021年)；平良愛香『LGBTとキリスト教：20人のストーリー』(日本キリスト教団出版局、2022年)；平良愛香『あなたが気づかないだけで神さまもゲイもいつもあなたのそばにいる』(学研プラス、2017年)；ウェスレー・ヒル『罪洗われ、待ち望む：神に忠実にありたいと願うゲイ・クリスチャン心の旅』岡谷和作訳(いのちのことば社、2024年)。小林昭博『同性愛と新約聖書：古代地中海世界の性文化と性の権力構造』(風塵社、2021年)；アラン・A・ブラッシュ『教会と同性愛：互いの違いと向き合いながら』岸本和世訳(新教出版社、2001年)；山口里子『虹は私たちの間に：性と生の正義に向けて』(新教出版社、2008年)；藤本満『LGBTQ 聖書はそう言っているのか？』(イクススエブックス、2024年)。

¹³「信徒と教師」の項についての詳しい解説は、JEA 宣教委員会宣教研究部門編『第7回日本伝道会議宣教ガイド 2023』、229-230 参照。

教派を越えた宣教協力を「はじめる」ための課題

ここではまず、教会の基本的な働きが確かめられる。社会が複雑化し、教会に求められる働きも多様化して、その本質を見失う危険も無視できない。そのような中で、改めて教会が「キリストの教会」として、そのなすべき働きを確かめることは重要である。ここでは礼拝・伝道・教育・奉仕・交わりの5つが挙げられている¹⁴。

次に、教会の歴史を学び続けることに言及されている。それは、日本にあるほとんどの教会に関わる、戦争加担の問題であり、「天皇を神とする偶像崇拜」の問題であり、「神社参拝を強要する国家に与するという罪」の問題である。これは、教会と国家の関係に関わる課題であり、突き詰めると教会の本質を問う問題でもある。教会は一体、誰を主権者（かしら）とし、誰の声に聴き従うのかが問われる¹⁵。

教会の歴史を学ぶということは、「変えるべきことと変えてはいけないものを見極めること」であり、それは決して単に過去の遺物を掘り起こすことに留まらない。そこから学び、今の時代の政治状況を注視して生きることにつながる。それは、常に為政者や政権に敵対する立場でもなければ、過激な左翼思想でもない。時代の変化を直視しつつ、時代の変化によっては変わっていかない真理に堅く立つことである。そこでは、為政者のためのとりなしが私たち信仰者の重要な務めとなる。そして祈り手であると同時に預言者として、神の御心を示し続けるのである。このような重大な務めは、改めて私たち自身の姿勢を問い直してくる。私たちの内にある隠れた罪があるならば、それを真摯に悔い改めなければならない。そしてかたちを変えて忍び寄る偶像礼拝の誘惑に、私たち自身が陥らないように、常に主の守りと助けを求め続ける必要がある¹⁶。

¹⁴「教会の働き」とここに挙げられた5つについての詳しい解説は、JEA 宣教委員会宣教研究部門編『第7回日本伝道会議宣教ガイド2023』、230-231 参照。

¹⁵ 我が国の歴史を踏まえて教会と国家の問題を教会論の視点から取り上げたものとして以下を参照。渡辺信夫『教会論入門』（新教新書、1963年）；渡辺信夫『教会が教会であるために：教会論再考』（新教新書、1992年）；渡辺信夫『戦争の罪責を担って：現代日本とキリスト者の視点』（新教新書、1994年）；渡辺信夫『今、教会を考える：教会の本質と罪責のはざま』（新教出版社、1997年）。

¹⁶ 戦争責任・戦後責任・信教の自由などの課題に関連した多彩な論考については以下を参照。

私たちの偽善や欺瞞の根本には、「ことば」と「わざ」の乖離がある。ローザンヌ運動を通して促されてきたのは、「ことば」と「わざ」を車の両輪のようにして進める包括的な福音宣教だった¹⁷。それは、主イエス・キリストご自身の生き方であり宣教の姿勢である。私たち日本のキリスト者が、改めてそのことの重要性を強烈に意識させられたのは、2011年の東日本大震災と、それに続く各地の災害においてであった¹⁸。そこでは、痛み苦しむ者の立場に立つ

袴田康裕編『平和をつくる教会をめざして』（一麦出版社、2009年）；袴田康裕編『世の光となる教会をめざして』（一麦出版社、2013年）；袴田康裕『地の塩となる教会をめざして』（一麦出版社、2017年）。日の丸・君が代問題については以下を参照。朝岡勝・佐藤美和子・梁陽日・教師A・弓矢健児『「日の丸・君が代」問題を考えるシンポジウム：教会は「日の丸・君が代」強制の問題といかに向き合うべきか』（一麦出版社、2013年）；岡田明・袴田康裕・奥野泰孝・松浦悟郎・山崎龍一・山口陽一『信仰の良心のための戦い：日の丸・君が代の強制に抗して』（いのちのことば社、2013年）；田中伸尚『日の丸・君が代の戦後史』（岩波新書、2000年）；土屋英雄『「日の丸・君が代裁判」と思想・良心の自由：意見書・証言録』（現代人文社、2007年）。

¹⁷ ジョン・ストット『現代の福音的信仰：ローザンヌ誓約』宇田進訳（いのちのことば社、1989年）；宇田進編『ポスト・ローザンヌ：これからの福音宣教を考える』（いのちのことば社、1987年）；日本ローザンヌ委員会訳『ケープタウン決意表明（コミットメント）』（いのちのことば社、2012年）。ローザンヌ運動のホームページは以下の通り。<http://www.lausanne-japan.org>

¹⁸ 渡辺信夫・朝岡勝・内藤新吾・金谷政勇・佐藤信行著／信州夏期宣教講座編『21世紀ブックレット 50 東日本大震災から問われる日本の教会：災害・棄民・原発』（いのちのことば社、2013年）；大塚史明・大友幸証著／東京基督教大学 国際宣教センター編『FCC ブックレット 教会は何を求められたのか：宮城・岩手での取り組み』（いのちのことば社、2014年）；秋山善久・川上直哉著／東京基督教大学 国際宣教センター編『FCC ブックレット 被災地支援と教会のミニストリー：東北ヘルプの働き』（いのちのことば社、2014年）；聖学院大学総合研究所『第1回東日本大震災国際神学シンポジウム』（聖学院大学総合研究所紀要 No. 54：2013年2月）；聖学院大学総合研究所『第2回東日本大震災国際神学シンポジウム』（聖学院大学総合研究所紀要 No. 56：2013年10月）；聖学院大学総合研究所『第3回東日本大震災国際神学シンポジウム』（聖学院大学総合研究所紀要 No. 58：2014年11月）；近藤愛哉『3.11 ブックレット 被災地からの手紙 from 岩手』（いのちのことば社、2012年）；中尾祐子『3.11 ブックレット 終わらないフクシマ：女性たちの声』（いのちのことば社、2013年）；野中宏樹・木村公一『3.11 ブックレット 原発はもう手放しましょう』（いのちのことば社、2014年）；朝岡勝『3.11 ブックレット <あの日>以後を生きる：走りつつ、悩みつつ、祈りつつ』（いのちのことば社、2014年）；木田恵嗣『3.11 ブックレット 福島で生きていく』（いのちのことば社、2014年）；佐々木真輝『3.11 ブックレット 「境界」、その先へ：支援の現場で見えてきたこと』（いのちのことば社、2014年）；中尾祐子『3.11 ブックレット 3.11 それからの

て考え、寄り添い、ともに痛みを担うとはどういうことか、そして教団・教派の壁を越えて、ともに協力し合う教会の使命を問い直されたのである。包括的な福音理解に立ち、社会的責任を積極的に果たすことで福音の宣教が前進していくのである。そしてそこでは、私たちの固定観念にとらわれないキリスト者の多種多様な働きが用いられ、それが広い意味で「教会のわざ」として進められ、あらゆる分野で神の国が実現していくのである。

教派を越えた宣教協力において重要なことは、自分の所属する教団・教派を否定したり、無視したり、無いもののように捉えることではない。むしろ私たちは、広いキリストのからだのどの部分に自分が属しているかをよく知り、自分の所属する教団・教派を愛し、その確かな信仰の足場に立って、全体の教会（教団・教派）に仕えるのである。その上で、他の教団・教派の特徴を理解し、協力を模索する。「教派・教団・教会・働きの壁」を越えるということは、そのようにして教団・教派の秩序を保ちつつ、積極的な相互理解と協力を促すものである。現実存在する教団・教派の存在そのものを否定したり無視したりするのは、主の摂理によって維持されている教会の秩序そのものを否定し無視することであって、それは決して教会を愛することにはならない。そして自分の所属する教団・教派を愛せない者は、他の教団・教派をよく理解して愛することもできないのである。

地域を越えた宣教協力を「はじめる」ための課題

ここでは主に日本宣教に関心が集中し、私たち一人一人が置かれた地域から福音宣教の進展が求められている。そこでは、私たちの置かれた地域の「歴史」、「文化」、「風習」との関係が問われる。従来から、福音と（異教）文化の関係は、大きく3つの類型があるとされてきた。対決型、妥協型、選択対決型であ

フクシマ：『終わらない日々』（いのちのことば社、2016年）；日本基督教団救援対策本部『現代日本の危機とキリスト教：東日本大震災緊急シンポジウム』（日本基督教団出版局、2012年）；松田牧人・木田恵嗣・若井和生・根田祥一・阿部信夫・新田栄一著／第6回日本伝道会議「痛みを担い合う教会」プロジェクト編『痛みを担い合う教会：東日本大震災からの宿題』（いのちのことば社、2017年）；藤原淳賀編／アリスター・E・マクグラス・菊池功・吉田隆・森島豊・朝岡勝・ジェフリー・メンセンディーク『大災害の神学』（キリスト新聞社、2022年）。